

## 選定名称

## 利根川・渡良瀬川合流域の水場景観

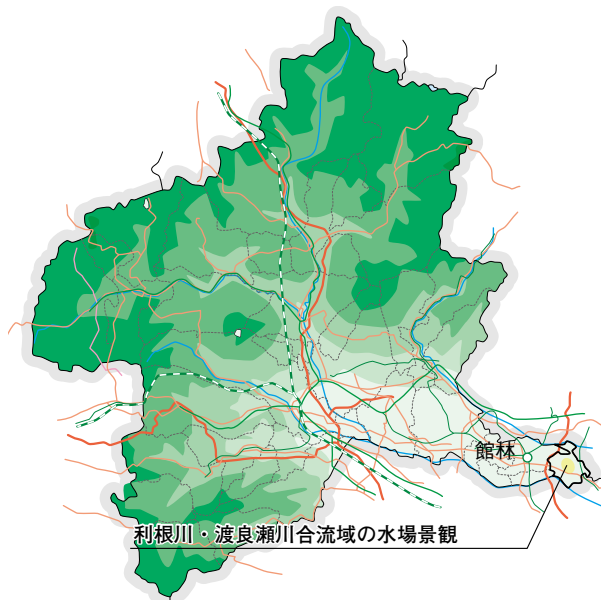
## 仮訳

Fluvial Landscape at the Confluence of the Tone and Watarase Rivers

## ■文化的景観の区域・面積

選定年月日	606.5ha
平成 23 年 9 月 21 日	
追加選定年月日	
追加選定年月日	

## ■位置



## ■解説

群馬県の最東端に位置する板倉町には、利根川と渡良瀬川との合流点に形成された沖積地が展開しており、水場と称されている。河川区域や旧河道、町内に点在する池沼群では、ヨシ・マコモなどの抽水植物群落や、ベニイトトンボなどの水棲動物、さらにはオオタカなどの猛禽類など多様な生態系が確認されている。特に谷田川では、後述する川田の畦を抑えるためにアカメヤナギが挿し木で植栽され、かつては薪炭材としても利用された。現在もアカメヤナギのほかジャヤナギ・オノエヤナギ・タチヤナギなどヤナギ類が卓越しており、特徴的な植生を形成している。

当地は古くから洪水多発地帯であり、生活を営むためにさまざまな工夫が行われてきた。人びとの居住は縄文時代から確認されるが、広大な沖積低地における集落形成や開墾は、中世末期から近世にかけて実施された築堤や河川の瀬替えによって実現した。さらに、近代には大規模な治水事業が行われ、現在に通じる水利システムが完成され、おもに水田耕作が行われてきた。水田の中には、河川や沼に面した湿地に溝を掘り、その掘削土を客土（揚げ土）し掘り上げ田を造成した、川田と呼ばれる農地も営まれている。また、自然堤防上等に形成されている居住地では、屋敷地の一面に土盛りをし、その上

に水塚と呼ばれる避難用建物が築造されている。屋敷地の北西にはエノキ・ムクノキなど自然堤防の環境に適した郷土種や、水防にも有効なタケ類が植栽されており、防風屋敷林として機能している。

このように、利根川・渡良瀬川合流域の水場景観は、大河川の合流域で形成された低地における、水と共生する生活・生業上のさまざまな工夫によって育まれた、価値の高い文化的景観である。しかしながら、近年は生活様式の変化等により伝統的な居住形態や営農形態が徐々に変容し、地域共同体も弱体化しつつある。そのため、当該地域における生活・生業を維持し当該文化的景観を保存・活用するため、板倉町は文化的景観保存調査を実施し文化的景観保存計画を策定した。調査では景観単位として、川田など治水によって開かれた農地、水塚などを伴う自然堤防上に築かれた居住地、排水機場など当該地域の水利技術を示す河川・水路が析出された。また、保存計画では重要な構成要素として川田、水塚、排水機場など 70 件の不動産が特定されている。これらに基づき、今次選定申出が行われた当該文化的景観について、重要文化的景観に選定し、その保存・活用を図るものである。

出典 / 『月刊文化財』第 576 号





屋敷林と水塚を備えた微高地上の屋敷地 (2017.3)



「水場の一寸高」の上に建つ水塚 (2017.3)



微高地の法面を形成する川原石の石垣 (2017.3)



河川の決壊口に立つ水神塔 (2017.3)



谷田川堤外地の川田 (2017.3)



漁に用いるキリゴミが点在する堤外地の池 (2017.3)



川魚料理をふるまう雷電神社門前の商店 (2017.3)



利根川上中流域の信仰を集める雷電神社の本殿 (2017.3)